

SORA Travel

web magazine 2017.feb. vol.83

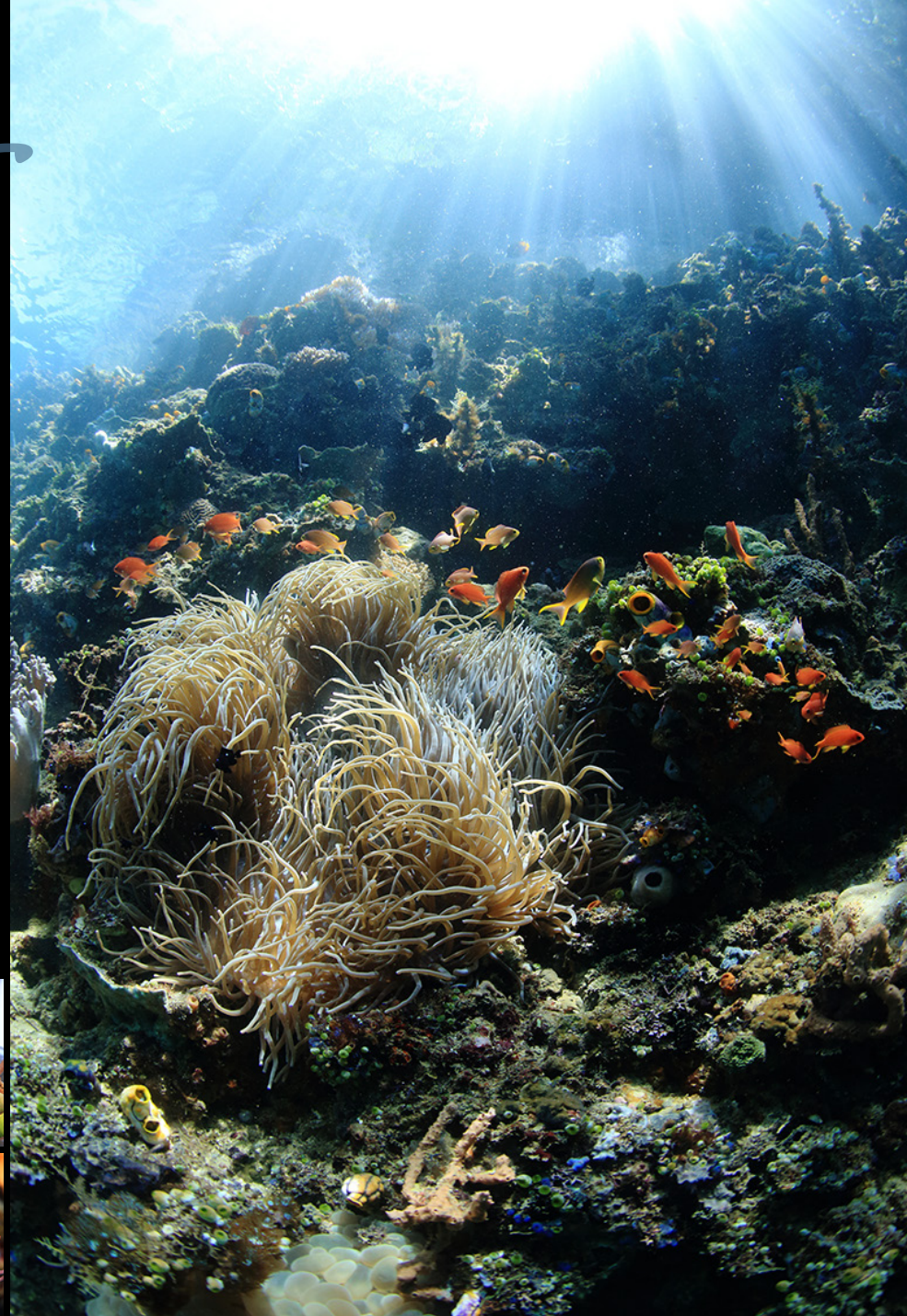
Photo & Text :
Yasuaki Kagii

Indonesia Ambon

今、行っておくべき海。初めてのアンボン

新しい海はないかな？ そんな願いをお持ちのダイバーの皆さん、吉報です。それほど遠くない海で、手付かずの素晴らしい海がありました。インドネシアのメナドがあるスラウェシ島の隣にあるアンボン。これまでは、あの珍しいサイケデリックフロッグフィッシュのことばかりで一躍有名になったが、実力はそれだけではなかった。ここに訪れる欧米人ダイバーが、「20年前のレンベのようだ」と形容するアンボン湾。まだここには小さな生命が凝縮していて、いろんな奇跡を起こしてくれそう。そして、バガラ湾&アウターリーフは、ワイドの景観が美しいポイントが並び、まだほとんどダイバーが入っていない無垢な海底を知ることができる。今回は、Maluku Resort and Spa に滞在して、併設のダイビングセンター DIVE into AMBON で4日間のダイビングを満喫してきた！

MAP
CLICK!



tsumi-shima tsumishima.com
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2017
World Tour Planners Co., Ltd.
All Rights Reserved.



今回は、すべてのポイントを紹介したいので、 ダイビングの後にすぐにテキスト書いたぞ(笑)!

7時過ぎに到着し、空港からの送迎車の中で水中カメラのセッティングを終えて、8時過ぎにリゾートに着いた時には、もうダイビングに行ける準備完了……完璧(笑)。迎え入れてくれたオーナーのカイさんから、簡単なブリーフィングを受ける。「今日の1本目は、大きな穴の中にソフトコーラルとかが群棲しているポイントです!」とのこと。勝手にアンボンには、マクロがメインだと思っていたので、少し拍子抜け。「20mm クラスのワイドと、もっと広い15mm のフィッシュアイだったら、どっちが良いの?」と聞くと、「15mm のフィッシュアイだ!」ということだった。ダイビングセンターの前から、ボートは出航。バギアラ湾を横切って、アウターリーフへ約40分ほど移動し、1本目のポイントに到着する。<Hukurila caves> は、外洋に面したポイントで、潮流が少し早かった。急いでエントリーして大きな岩の亀裂に入ると、そこは、ソフトコーラルやイソバナ、フトヤギ、キサゴなどのサンゴの仲間が壁一面に群生していた。ちょっとした色の洪水。こんな場所がアンボンにあるなんて……少し冒険気分になる。水深は、20mくらいの穴なので、ナイトロック스가あつた方が十分に楽しめると思う。重なり合いながら、まるでフラワーアレンジメントのような海底を色んな角度で眺めながら楽しむ。そして、みんなで撮影したのが、カエルアンコウ。少しずつ海底を歩いていた。約40分ほど穴の中の色、光、青色を楽しんだ後は、水深を上げてリーフの上に。浅場の岩礁に波が当たり、碎ける景色が広がる。その前にお魚たちが泳いでいく。2つの別の世界を旅した、そんな気持ちになった。



Hukurila slops



アンボン Indonesia
Ambon
Travel

Franky's point



ワイドの景観がメインだけど、アウターリーフでもマクロの生き物は面白い！

2本目は、隣のポイントで、<Hukurila slops>。ここは1本目とは真逆のポイント。緩やかなスロープ状の海底で、ゆっくりリラックスした気持ちで潜れるポイント。大きなイソバナや妙な形をした大きなカイメンもあるが、ここはマクロに集中。まずガイドさんは、小さな流行りのエビ、シムケンスを見せてくれる。こんなに広い海で、よく見つけられるなあ……、というのが正直な感想。ありがたく撮影して、その後もウミウシやカエルウオ、エビの仲間を教えてもらいながら進んでいく。もっとも気になったのが、平たいカイメンに住む平たいハゼ。正面顔がとにかく可愛くて、たくさん撮影した！

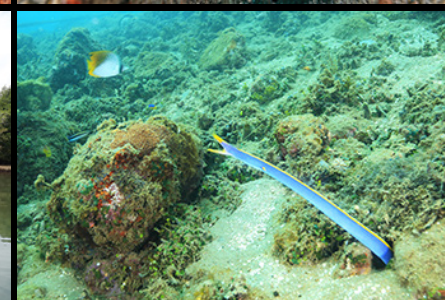
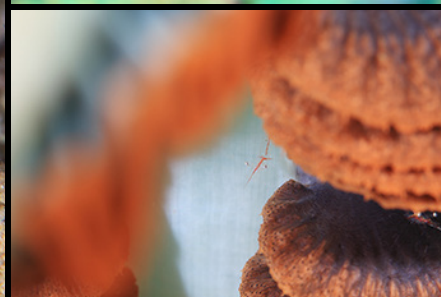
そして、ランチのために一度リゾートに戻った。時刻は午後の1時45分で、3時から次のダイビングに出航するというので、早速ランチ。

3本目のダイビングは、リゾートから約15分ほどの<Franky's point>。水深10mの白い砂地が広がるポイント。浅瀬の優しいポイントで、色んな生物を見ていく。ここで力を発揮して欲しいのが、ガイド力。ウミウシカクレエビやタツノイトコなどを見せてくれる。他の砂地オンリーのポイントに比べて、生き物は少し少ないかな……と思っていたけど、他のグループは、カエルアンコウを3個体も見えていた……。ポイントは良しのガイド力かな……（笑）。最後は、浅瀬のリーフに到着して、顔にミッキーマウスの耳を描いたウツボに挨拶をして、その日のダイブを終えた。

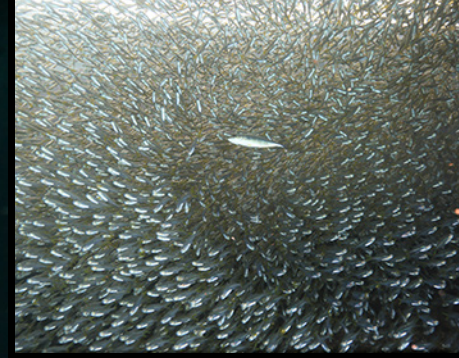
2日目は、マクロで有名なアンボン湾に向かう。リゾートからまず車移動。ダイビング器材はすでにスタッフが運んでくれているので、カメラだけを持って車移動。約10分で、出航の桟橋へ。乗船するともうすでにすべての準備が整っていた。「さあ、行くぞ!」

約20分ほど船で移動。今回は湾の西側の海岸線ラハゾーンサイドに向かう。大きなボリュームで音楽を流す田舎町が並ぶ海岸線に到着。どうやらここがポイントのよう。陸上の雰囲気は、同じくインドネシアにあるレンベに似ている。ポイント名は<Rhino city>。よくレノーピアスが見られるので、この名前が付いたようだ。エントリーして水深8mほどの様子を伺う。色んな生えものが見える。ヤギやカイメン、イソギンチャクなどなど。それも良い感じで…。世界中の、色んな有名マクロポイントを経験している立場から言って断言できる。まずは水深を20mまで下げ、紫色のレノーピアスを探しに行くが、残念ながら見つからず。しかしその辺りの水深はソフトコーラルが群棲していて、とても興味深い。海底の生えものに隠れる様々な生き物を探していく。珍しいものもいれば、普通種もいる。しかし環境が面白いから、ウォッチングも撮影も本当に楽しい。最終的には、ツノザヤウミウシやキンチャクガニ、ハナヒゲウツボ、コブシメ、カエルアンコウなどの不動の人気種もきっちりと見せてもらい、約70分のダイビングを終えた。

手付かずの素晴らしいアンボン湾のポイント

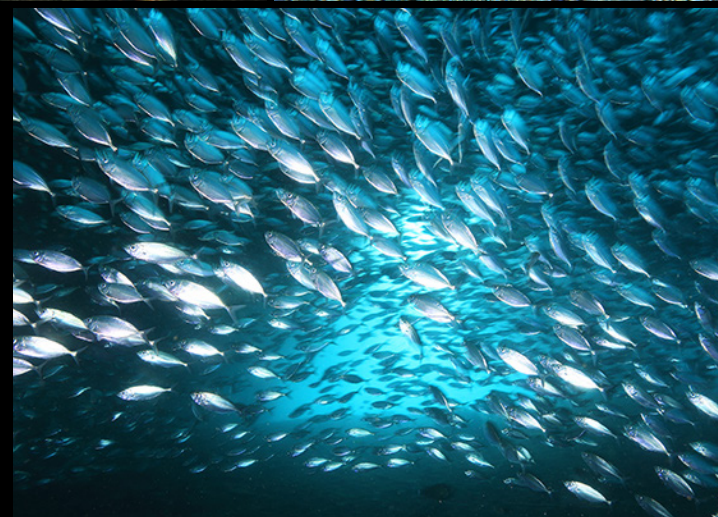


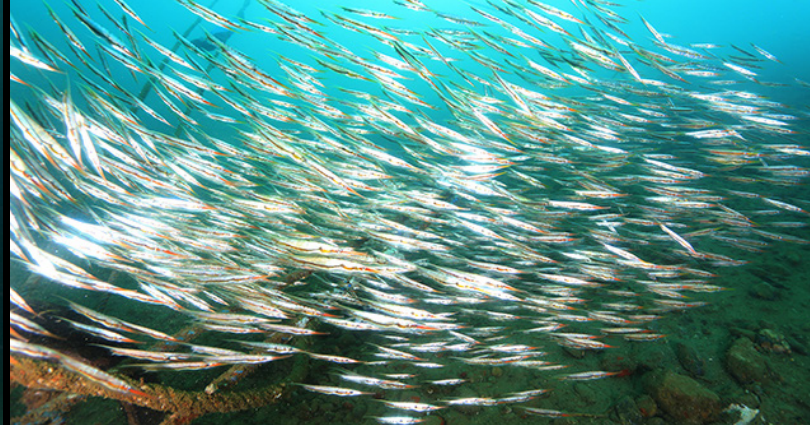
2本目は、ある意味、衝撃だった！



ワイドもマクロも面白い「LaHa I」

1本目の隣のポイントに潜ろうとしたが、潮流が強いので移動。ポイントは<LaHa I>。何の名前?と聞くと、ラハは村の名前だそうだ。では、1本目のポイントの前の村の名前は?と聞くと、あそこもラハ村だそうで、この一帯は、ラハゾーンだと教えてくれた。エントリーして様子を伺う。海底の砂地は明るく、1本目よりも砂が細かく、混じりけがない。ガイドのアランに着いて行くと、大きな魚群が見えてきた。きっとミズン。その群れに誘われるように着いて行くと、頭上には船影、そして栈橋が見えてきた。その周囲を見渡すと、なんとお魚だらけ。アジの仲間やフエダイの仲間がごちゃごちゃと群れていた。アンボン=マクロのポイントだなんて……本当に実際に来ないとわからない。群れにまみれながら、撮影、撮影。少し可笑しな動きをするお魚の群れを発見。撮影しようと接近すると、なんと大型のゴンズイの、これまた大きな群れだった。想像以上の迫力と、気持ち悪さ……で、私は圧倒される。この栈橋の魚群はいつもいるそうだ……。ここは一見の価値がありありだ。そして、カンカンという合図でガイドと進んでいくと、色々と披露してくれた。ヘアリーフロッグフィッシュ、イッポンテグリ、ハナイカなどなどのかなりのアイドル種。最後には、メガネオオも見せてくれた。簡単に好きになりすぎるのは、どうかな?と思うけど、この1ダイブで、アンボンの海が大好きになった。





アンボン Indonesia Ambon Travel



新しい村とナイトダイビング!

3本目は<kampung baru>。バルの意味は<新しい>。カンブンは村という意味。<新しい村>の前のポイント。ここも大変面白かった。エントリーしてすぐに、オレンジ色のカイメンに擬態するベアのカエルアンコウを見ていたら、上からムレハタテダイの群れが降りてきて、ブイのロープにたむろしていたヨロイウオと2重層を始めた。マクロだけかと思いきや、またまたワイドのカメラが活躍。その後も、イバラダツやウミウシなどを教えてもらって進んでいくと、水深20mあたりの砂地に、50センチほどの背丈のソフトコーラルが群棲していた。それは、本当にお花畑のようで、普通のワイドレンズを用意してきた私は大後悔……。15mmの超広角フィッシュアイワイドレンズにすれば良かった……。ブリーフィングが短くて単純な分、予想していなかった景色が飛び込んで来る。新しい海に来了醍醐味を感じている。楽しくて仕方がない。

この日はナイトダイブまでの計画で、船の上で休憩しながら、サンセットを待つ。夕方6時半頃から用意を始め、7時頃にエントリー。エントリーしたポイントは<willight zone>。リゾートには8時頃に戻る予定だが、すでにそれは無理なスケジュールとなっていた。エントリーしてまず始めに見てもらったのが、フリソデエビのベア。ヒトデを咥えながら、出迎えてくれた。その後もナイトならではのエビカニ系なども楽しみながら、托卵したオイルンヨウジ、お魚を咥えたままの大きなコブシメ、交接中のウミウシなどを観察した。1時間越えのダイブとなったが、さすがに昼間とは違った面白いダイブを経験でき、大満足だった。

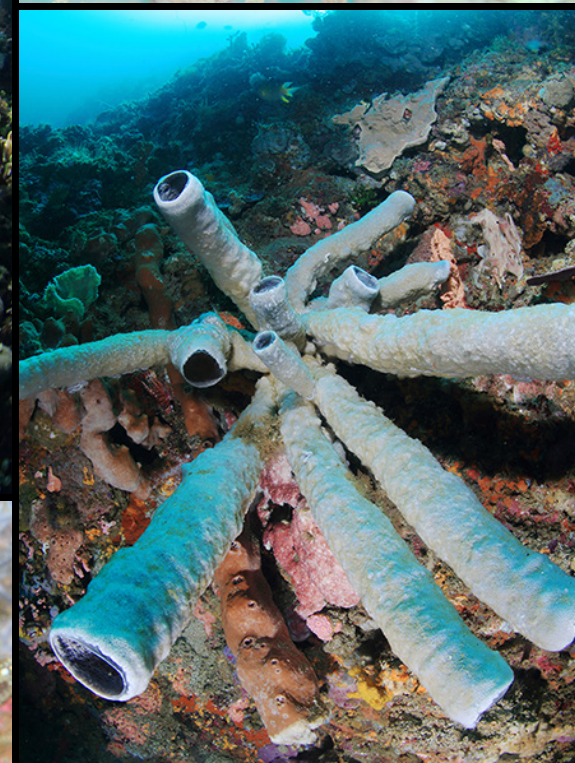
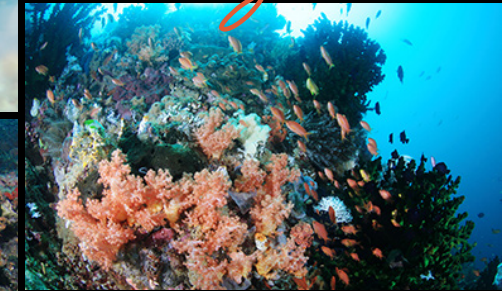
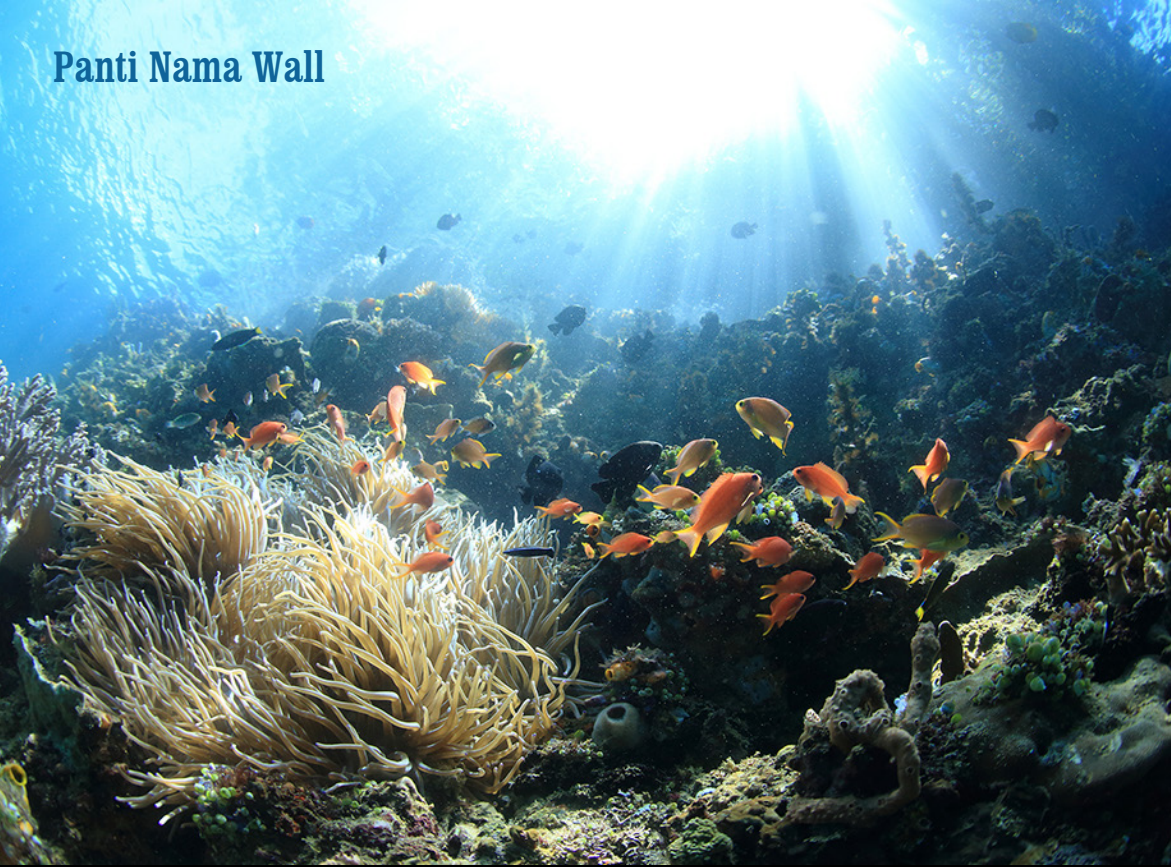
昨日は、西側のラハゾーンサイド。今日はアマフスーンサイド

3日目もアンボン湾へ。今回も昨日と同じく車で10分ほど移動して、アンボン湾の最深部にあるラテリの浅橋から出発。今回は、湾の東側にあるアマフスーン・サイドで潜った。ポイントの名前は<Panti Nama Slope>。黒砂のポイントで、マクロの生き物が楽しめるポイント。エントリーしてすぐに、カエルウオを披露してもらう。そして、ツノザヤウミウシなどを見た後、ウミシダに共生するニシキフウライウオのペア。これが、また良いモデルになってくれた。随分時間を掛けて撮影して

いると、ガイドのアランが呼ぶ。3本の指を立てた後に、指差す方向の先には、大きなハナイカと2匹の小さなハナイカ。よく見ていると、大きなハナイカはメスのようで、産卵をしようとしている。そのメスと2匹のオスが、小さな体を少し打つけながら、メスを追っかけている。きっと産卵後のチャンスを狙っているのでは……？ さて、3日目のダイビングの始まりも、とても良かった!アンボン湾、楽しい!

アンボン Indonesia
Ambon
Travel





潜るたびに、どんどんアンボンを好きになっていく

2本目のポイントは、隣の<Panti Nama Wall>。ドロップオフのポイントで、1本目のポイントとは、ガラッと様子が違った。垂直に落ち込んだ壁を降りていくと、大きなカイメンの上には、オオモンカエルアンコウが、ドカンと鎮座。その後も、オラウータンクラブやニシキフウライウオ、スパインチークアネモネフィッシュなどを見ていく。このポイントがすごいなと思ったのは、とにかくカラフルだということ。イソバナやウミシダなども多いが、それ以上に壁に群生するホヤやイソギンチャク、カイメンの華やかさだった。そこにまだダイバーを恐れていないお魚たちが共演する。特に嬉しかったのは、ミナミハコブグの幼魚とボーキュバインパファーフィッシュのペア。そして、美しいフトヤギの中で、逃げないキンチャクブグの幼魚など。浅場は、光が差し、放射状の白い光が水面から差し込み、美しい景観を作る。私がアンボンを好きになった決定的なポイントかもしれない。

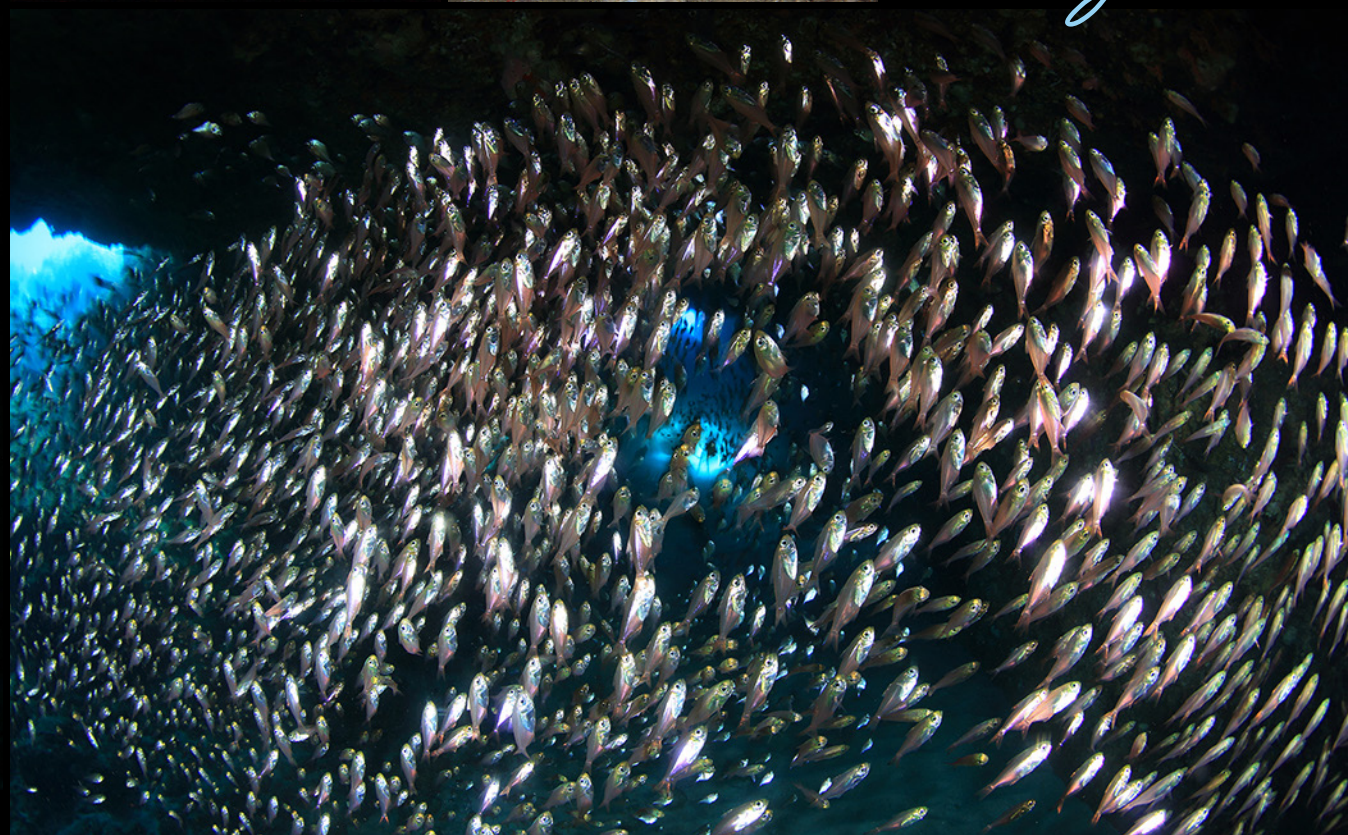
船上でランチを食べてからの3本目は、少し桟橋の方に帰る途中にある<Amahusa Beach>。ここは町中のビーチで、恋人たちが海岸線でデートをしている。海底の様子は白い砂地。ここでも面白いように生き物が現れた。アンボンスコーピオンフィッシュが4匹、ヘアリーブロッグフィッシュが3匹、ヘアリーなカミソリウオ、ミナミハコブグの幼魚、ツマジロオコゼ、タツノオトシゴの仲間など、数多くの生き物を観察、撮影し、またまたおながいっぱいで、浮上した。アンボン湾のポイントは、どこでも面白い。

Amahusa Beach





アンボン Indonesia
Ambon
Travel



最終日! アウターリーフのポイントへ、再び!

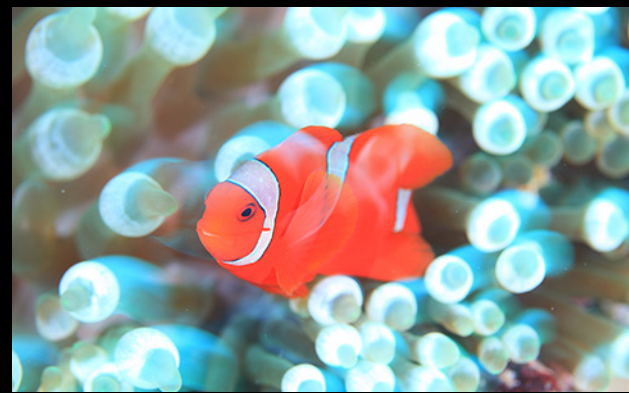
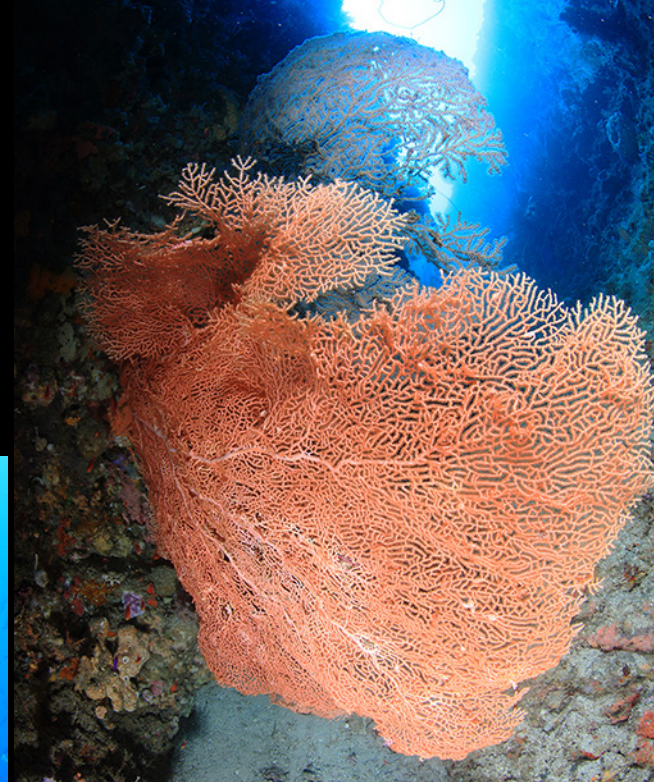
4日目。波が少し高かったので、1時間出航を遅らせて9時に出る。最終日の今日は、外洋のポイントへ向かう。約40分ほど掛けて<ALFA BAR>に到着。エントリーして、岩礁の下に潜り込む、崩れる波の面白い造形をまず撮影。その後、ガイドのアランが指差す方向には、小さな穴と細長い砂地があり、その周囲には、数多くのスカシテンジクダイ、ハタンボが群れていた。なかなか良い群れの形に変形するので、時間をかけて撮影。その後、今回のメインであるエアドームに向かう。穴を潜り抜け、水面に顔を出すと、キラキラと光る鍾乳洞が。花瓶のような形、波のような形など自然の造形を楽しむ。このポイントの特徴はこの鍾乳洞だと聞いていたが、私をもっと、それともかなり魅了したのは、暗闇に光るフラッシュライト・フィッシュ（ヒカリキンメ）だ。静かに佇んでいると、大きめの光の群れが迫ってくる。くるくると光りながら、まるで宇宙空間に投げ出されたような感覚になる。とてもとても素晴らしい環境&経験だった。準備なしではなかなか上手く撮影できず、これは肉眼で是非楽しんでほしい。その後、明るいリーフに出て、少し水深を下げて、ソフトコーラルの亀裂に連れて行ってもらったが、先ほどのエアドームでの思い出があまりに心に残り過ぎて、綺麗な景色なのだが、あまり心が動かなかった。それほど光るフラッシュライト・フィッシュ（ヒカリキンメ）の舞は、忘れられない経験となった。

また帰ってきたい、と心から思った

2本目のポイントは、ドロップオフのポイント<Batu badiri>。潮が行き来する壁は、カイメンやホヤ、イソギンチャクなどが豊かに群棲し、かつ手付かすの様子が伺える。大小の亀裂には、イソバナやフトヤギが連立する。潮当たりの良い場所では、クマザサハナムロやカスミチョウチョウウオが群れ、華やかな空間になる。残り2本のダイビングとなったが、例えアイドル種に出会えなくとも、豊かな自然の中で潜るダイビングは、どれも心を温かくさせてくれる。と言いながらも一番最後にガイドが、小指の爪よりも小さなカエルアンコウの幼魚を見つけ出してくれたが……（笑）。

3本目は<Sea mount>。少し沖合にある浅瀬の根で、トップは砂地とサンゴで覆われている。その上をノコギリダイとアカヒメジが群れている。中層にはクマザサハナムロが群れていて、どこか忙しないと思ったら、上からロウニンアジが降りてきた。どうも捕食の機会を狙っているようだ。水深も浅く、のんびりしたダイビングを楽しめるスパインチークアネモネフィッシュやカエルウオの仲間、エビカニ系も観察、撮影しながら、最終ダイブを終えた。大満足。

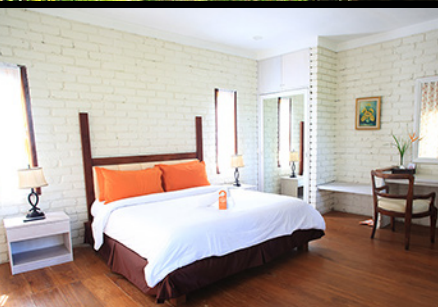
Batu badiri



アンボン Indonesia
Ambon
Travel

Maluku Resort and Spa

2015年10月に DIVE into AMBON を併設するようになって、新しく生まれ変わったリゾート。空港やアンボンの街からは離れた静かな環境で、海岸線に位置する。広い敷地には、3カテゴリーの宿泊施設、レストラン、プール、ダイビングセンターなどがある。客室は、独立ヴィラ型が4部屋（2部屋はバス付）。海が見えるスタディオールームが2部屋。スタンダードルームが14部屋。すべての客室は広く、エアコン、ホットシャワー、ケーブルTV、無料WIFIを完備。朝食は、焼き飯、焼きそば、から揚げ、パン、フルーツ、ジュースなどのビュッフェ式。ランチは、ダイビングの時は、ポートの上で食べることが多いが、お任せランチ。夕食は、セットメニューになっているが、ゲストの人数によっては、スターター、メイン、デザートなどのビュッフェ式になる。味付けは、日本人好みで美味しい。



アンボン Indonesia
Ambon
Travel



DIVE into AMBON

アンボンで4年の経験を持つダイビングセンター。かつてレンベで活躍したイギリス人のカイ、オーストラリア人のバーブ夫妻が、アンボンの海に惚れ込んで作ったサービス。ポートは3隻所有。バグアラ湾とアンボン湾に大きなポートを1隻ずつ配置する。ダイブマスターは全部で5名で、1グループに1名のダイブマスターが同行する。海況やゲストの数によって、その日にバグアラ湾とアンボン湾に行くか、また一方に行くかを決める。通年、営業しているが、海が荒れる7月、8月はクローズ。6月、9月はアンボン湾のマックダイブにしか行かない。水温は少し下がるが、マックダイブにだけ興味のある方は、このシーズンがオススメ。最終日の午前中は、アンボンの街や滝、天然ウナギ観察ツアーなども催行されている。

